



イベントで特別な体験を

でした。そして、氷の彫刻のその精巧さには相変わらず驚かされました。ちなみに、とある会合で、(大人でも)大雪像滑り台を滑ってみたと

今年も旭川冬まつりを楽しみました。2月上旬にかけては、雪が少な

かったり、日中の気温が思いがけず上昇したりという中、気を揉んだ市民の方も少なくなく、たと思います。しかし、ひとたび開幕すれば、メインの大雪像は大迫力で迎えてくれましたし、市民の方々の雪像はリアルに再現されたものから愛嬌たっぷりのものまでバラエティ豊かな

という体験談を複数聞き、遠慮せずに滑っておけばよかったと、やや後悔しています。

来場者数は約82万人。昨年にくらべて1割程度減少しましたが、報道によれば、花火の回数が減ったことに加え、昨年はいわばドラゴンクエスト効果で押し上げられていたという面もあるようです。しかし、今年

は、海外からの観光客を更に多くみかけ、その意味で来場者の裾野は広がっているように感じました。スキー目的や旭山動物園などの観光目的も合わせ、ホテルの客室稼働も良かったと聞きます。

先行きに目を転じると、3月にはバーサーロペット・ジャパン、5月から6月にかけてはあさひかわ菓子博(第28回全国菓子大博覧会北海道)が控えており、遠方から多くの方々が来訪することが見込まれます。関係者のご尽力に敬意を表しつつ、旭川の魅力発信や観光振興にも弾みがつくとが期待されます。

さて、旭川で初の開催となる全国菓子大博覧会には、そのルーツを辿ると

1911年に東京で開催された品評会が始まりとされており、ほぼ4年に一度のペースで、全国各地で開催されたとのこと。北海道では68年の札幌開催以来、2回目となります。大手メーカーや老舗を含めて幅広いお菓子屋さんが集結しますし、通常ではなかなか見ることのできない大型工芸菓子の展示なども予定されており、個人的にも大いに楽しみです。

海外における和食や日本酒の人気の高さはつとに知られていますが、市内菓子製造業の方からは、抹茶やゆずの味はもはや海外でも一般的という声も聞かれるようになりました。お菓子は人々に笑顔を運ぶ力があると

言われます。日本企業のその力を国内はもとより海外にも届ける、そんな動きが今後ますます増えてくるのかもしれない。

(毎月第四週に掲載します)



【足立祐一(あだちゆういち)】一九七三年、大分県出身。九州大学経済学部卒。金融市場局企画役、国際局企画役、ドイツ・フランクフルト事務所長、調査統計局地域経済調査課長を経て、二〇二三年、旭川事務所長に就任。